

声明譜に見られる「半音」の源流について

浅田健太郎
(2001年9月27日受理)

About the origin of "半音" in the scores of *Shōmyō*

Kentaro Asada

This article intends to consider the origin of the notes, "半音" (*Han-on*; it means half sound) in the scores of *Shōmyō*. Also, it clarifies via what course it led for "半音" to be used for the scores of *Shōmyō*.

"半音", which was devised as the note to the closed syllable in Sanskrit language in the Ancient Chinese time was inherited to the research of Sanskrit in Japan and it was diverted to the scores of *Shōmyō* after that. It is estimated in the late *Heian* era.

Key Words: *Han-on*, the scores of *Shōmyō*, the research of Sanskrit in Japan, closed syllable, stroke of *tadatsu*

キーワード: 半音、声明譜、日本悉曇学、閉音節、但達点

はじめに

筆者は先稿¹において、声明譜における「半音」注記を入声音が閉音節を保存している証拠とした。しかし「半音」が日本、あるいは中国の韻学においてどのような術語として使用されてきたのかについては、詳しく論ずることができなかった。本稿では中国、日本において「半音」²がどのような概念を説明するのに利用されていたのか、また声明譜に流用されるに至るまでいかなる経緯を辿ったのかについて明らかにしてみたい。

1 中国漢訳陀羅尼の注における「半音」

まず「半音」という術語は中国漢訳仏典、しかも陀羅尼の音訳部における注記を源にすることは前稿でも述べたところである。『大正新脩大蔵経』(以下『大正蔵』と略称)の密教部において「半音」に類する注記が見られる経典を挙げる(括弧内に大正蔵No.・訳者を記す。また訳年が分かるものについては併記する)。

大毘盧遮那経広大儀軌 (No. 851・善無畏)、大毘盧遮那成仏神変加持経蓮華胎藏菩提幢標幟普通真言蔵広大成就瑜伽 (No. 853・法全著 847 ~ 859)、大日経略撰念誦随行法 (No. 857・不空)、金剛頂瑜伽中略出念誦経 (No. 866・金剛智 723)、諸仏境界撰真實経 (No. 868・般若)、金剛頂蓮華部心念誦儀軌 (No. 873・不空)、仏説一切如来真實撰大乘現證三昧大教王経 (No. 882・

施護 1015)、秘密三昧大教王経 (No. 883・施護)、一切如来金剛三業最上秘密大教王経 (No. 885・施護 1002)、金剛場莊嚴般若波羅密多教中一分 (No. 886・施護 980)、仏説無二平等最上瑜伽大教王経 (No. 887・施護)、瑜伽大教王経 (No. 890・法賢 1001)、仏説幻化網大瑜伽教十忿怒明王大明観想儀軌経 (No. 891・法賢)、大悲空智金剛大教王儀軌経 (No. 892・法護)、仏説毘奈耶経 (No. 898・?)、十八契印 (No. 900・惠果もしくは空海作)、陀羅尼集経 (No. 901・阿地瞿多 653)、都部陀羅尼目 (No. 903・不空)、阿閼如来念誦供養法 (No. 921・不空)、薬師如来観行儀軌法 (No. 923・金剛智)、無量壽如来観行供養儀軌 (No. 930・不空)、金剛頂経観自在王如来修行法 (No. 931・不空)、金剛頂経瑜伽観自在王如来修行法 (No. 932・金剛智)、仏説大乘観想曼拏羅浄諸悪趣経 (No. 939・法賢)、仏説無能勝幡王如来莊嚴陀羅尼経 (No. 943・施護)、大仏頂如来放光悉怛多鉢怛羅陀羅尼 (No. 944 A・不空)、金輪王仏頂要略念誦法 (No. 948・不空)、菩提場所説一字頂輪王経 (No. 950・不空)、大聖妙吉祥菩薩説除災教令法輪 (No. 966・尸羅跋陀羅)、仏頂尊勝陀羅尼経 (No. 968・杜行顛 679)、大宝広博樓閣善住秘密陀羅尼経 (No. 1005 A・不空)、牟利曼陀羅呪経 (No. 1007・?)、聖観自在菩薩心真言瑜伽観行儀軌 (No. 1031・不空)、金剛恐怖集會方廣儀軌観自在菩薩三世最勝心明王経 (No. 1033・不空)、阿闍多羅陀羅尼阿嚧力経 (No. 1039・不空)、観自在菩薩心真言印念誦法 (No. 1041

・不空)、仏説一切仏撰相応大教王經聖觀自在菩薩念誦儀軌 (№1051・法賢)、聖賀野紇哩大威怒王立成大神驗供養念誦儀軌法品 (№1072 A・不空)、七俱胝仏母所説准提陀羅尼經 (№1076・不空)、如意輪陀羅尼經 (№1080・菩提流志)、觀世音菩薩如意摩尼陀羅尼經 (№1083・宝思惟)、觀世音菩薩如意摩尼輪陀羅尼念誦法 (№1084・宝思惟)、觀自在菩薩如意輪念誦儀軌 (№1085・不空)、觀自在菩薩如意輪瑜伽 (№1086・不空)、不空羈索陀羅尼經 (№1096・李無諂 700)、不空羈索陀羅尼自在王呪經 (№1097・宝思惟)、仏説聖觀自在菩薩不空王秘密心陀羅尼經 (№1099・施護)、仏説一髻尊陀羅尼經 (№1110・不空)、金剛頂瑜伽青頸大悲王觀自在念誦儀軌 (№1112・金剛智)、大樂金剛薩埵修行成就儀軌 (№1119・不空)、金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀 (№1120・不空)、金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌 (№1122・不空)、金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法 (№1123・不空)、普賢金剛薩埵略瑜伽念誦儀軌 (№1124・不空)、仏説金剛手菩薩降伏一切部多大教王經 (№1129・法天)、聖金剛手菩薩一百八名梵讚 (№1131・法賢)、金剛王菩薩秘密念誦儀軌 (№1132・不空)、大虚空菩薩念誦法 (№1146・不空 766)、修習般若波羅密菩薩觀行念誦儀軌 (№1151・不空)、仏説持明藏瑜伽大教尊那菩薩大明成就儀軌經 (№1169・法賢)、仏説金剛香菩薩大明成就儀軌經 (№1170・施護)、金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩法 (№1171・不空)、金剛頂經曼殊室利菩薩五字心陀羅尼品 (№1173・金剛智)、五字陀羅尼頌 (№1174・不空)、金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩供養儀軌 (№1175・不空)、大聖妙吉祥菩薩秘密八字陀羅尼修行曼陀羅次第儀軌法 (№1184・菩提仙 824)、妙吉祥平等秘密最上觀門大教王經 (№1192・慈賢)、金剛手光明灌頂經最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品 (№1199・不空)、底哩三昧耶不動尊威怒王使者念誦法 (№1200・不空)、底哩三昧耶不動尊聖者念誦秘密法 (№1201・不空)、不動使者陀羅尼秘密法 (№1202・金剛智)、金剛頂瑜伽降三世成就極深密門 (№1209・不空)、甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌 (№1210・不空)、聖閻曼德迦威怒王立成大神驗念誦法 (№1214・不空)、仏説妙吉祥最勝根本大教經 (№1217・法賢)、聖迦怛怒金剛童子菩薩成就儀軌經 (№1222・不空)、金剛童子持念經 (№1224・?)、大威怒烏芻荼摩儀軌經 (№1225・不空)、大威怒烏樞摩明王經 (№1227・阿質達霰)、大輪金剛修行悉地成就及供養法 (№1231・金剛智力)、仏説出生一切如來法眼遍照大力明王經 (№1243・法護)、毘沙門儀軌 (№1249・不空)、吽迦陀野儀軌 (№1251・金剛智)、仏説摩利支天經 (別本) (№1255・不空)、仏説穰廢

梨童女經 (別本) (№1265・瞿多)、大聖天歡喜双身毘那夜迦法 (№1266・不空)、金剛薩埵説頻那夜迦天成就儀軌經 (№1272・法賢)、聖歡喜天式法 (№1275・?)、迦樓羅及諸天密言經 (№1278・般若力)、摩醯首羅大自在天王神通化生伎芸天女念誦法 (№1280・?)、仏説最上秘密邦擎天經 (№1288・法賢)、囉嚩拏説救療小兒疾病經 (№1330・法賢)、仏説消除一切災障宝髻陀羅尼經 (№1400・法賢)、仏説金身陀羅尼經 (№1414・施護)

さて次にその内容に目を転じると、「半音」が注される字はある程度限られていることに気付く。梵字が対応しており原音が参照できる例によれば、いわゆる但達点、すなわち母音を伴わない子音に対応する漢字に半音注が付されていることが多い(例えば吒 t) (吒半音呼)、迦 k (半音)³ など。これに当てはまらない例が少数見られるが、誤写と判断する。

更に細かく見ると、訳者や時代によって特徴的な点も見られる。次に半音注を使用した訳者と当該の音訳字を挙げる(括弧内は頻度)。

阿地瞿多 (653頃)	知 (1)、悉 (1)
杜行顛 (679頃)	牟 (1)
善無畏 (637~735)	吒 (2)
金剛智 (671~741)	吒 (7)、悉 (1)、嚩 (1)
李無諂 (700頃)	吒 (19)
宝思惟 (?~721)	吒 (5)
菩提流志 (?~727)	吒 (1)
阿質達霰 (?~732)	吒 (6)
不空 (705~774)	吒 (116)、迦 (20)、多 (6)、嚩 (1)、麼 (1)
般若 (781頃)	吒 (1)、洗 (1)、多 (6)、嚩 (1)、底 (1)、閉 (3)、泥 (1)、寧 (1)
菩提仙 (824頃)	吒 (5)、迦 (1)
法全 (850頃)	吒 (1)
尸羅跋陀羅 (唐)	吒 (1)
瞿多 (唐)	吒 (1)
般若力 (唐)	吒 (1)、羅 (1)
施護 (980頃)	吒 (223)、俱 (16)、咄 (9)、跂 (1)
法賢 (法天) (?~1001)	吒 (164)、咄 (26)、酷 (2)、俱 (5)
法護 (963~1058)	吒 (9)、迦 (1)
慈賢 (南宋)	吒 (10)

確認できる仏典の中で最も古い半音注は阿地瞿多の

訳になる『陀羅尼集経』(大正蔵No. 901)に見える。

唵結知(二合)伽(去音)陀鉢(去声)泮(破吐反此陀羅尼第二句内知字半声呼之)
南(上)無悉(半音)唎哩(二合)矢隊迦(去)
南(上一)踰他伽陀(去)南(上二)唵鞞囉(去)
時鞞囉(去)時(三)(以下略)(注去上所依注去上音法誦之注二合所其上一字必須半音与其下字合音誦之注半音所必須片音)

これは、「結知」の「知」を「半声」で呼ぶというもの、「二合」注(音訳漢字二字が梵字一字に対応することを示す)の時は上字を「半音」で読むというもの、また「無悉(半音)」に見られる「半音」は「片音」の意であるというものである⁴。「結知」の場合「知」がt(あるいはṭ)であることを指しており、「二合」の説明は例えば「唎哩(二合)」の「唎」がt(あるいはṭ)であることを指していると思われる。「片音」の意は必ずしも明らかでなく、「悉(sit)」のsを指すのかtを指すのか、はたまた上字の「無」のmを指すのか定かでないが、何れにしる漢字が指す音全体でなく母音を伴わない子音を指していると思われる。

訳経の年代が確定できるもののうち次に古い杜行顛訳仏頂尊勝陀羅尼経(大正蔵No. 968)を見ると烏牟(半音)の例があり、またその「半音」に関して「半音」は「半声」で読み、「二合」は上字を「半」にして読む、という注が見られる。以上二人の訳者は半音が注される字が後続の仏典と比べて異質であり、「吒」字の例が見えない。

ところが上の仏頂尊勝陀羅尼経とほぼ同年代かと推定される善無畏から後の訳者を見ると、半音注の使用は「吒」字が中心となる。しかも単独もしくは二合注が付された下に位置する「吒」に限られてくる。特に善無畏から阿質達霰まではその傾向が顕著で、ほとんど「吒」にのみ用いられているといつて良い⁵。「吒」はs、すなわちṭであり、子音を指すことに変わりないが、その用法が極端に限定されているのは注目すべきであろう。

以上、「半音」が使用され始めたときの詳しい機能は明らかでないにせよ、不空を代表とする「半音」の中心的な使用者は、恒達点を加えられた梵語音を音訳する工夫として「半音」を使用していると見ることができる。

2 日本悉曇学における「半音」

中国における漢訳仏典を輸入した日本側ではどのように「半音」が使用されていたのだろうか。日本撰述仏典の「半音」には以下の例が管見に及んだ。

仁海(951~1046)『大日如来剣印』(No. 864 A)

悉(半音)、吒(半音)

寛助(1052~1125)『別行』(No. 2476)

ㄨ力迦(半音)、ㄨ吒(半音呼)、ㄨ吒(半聲)、ㄨ(吒(半音))

ここで見られる「半音」は中国で行われてきた使用法を踏襲しており、恒達点に該当する部分に「半音」が使用されていると見られる。

次に、日本撰述の悉曇研究書では「半音」に言及したものが多く、そちらを検討する必要がある。この点に関しては馬淵(1984)(以下『韻学史』とする)が既に詳細に調査検討を加えているので、ここではそこから「半音」に関係する部分を抄出し、それに大正蔵経の例を適宜補っていくことにしたい。

宗叡(真言系・809~884)『悉曇私記』(引用部の括弧内は筆者による。以下同。)

「吉八反等者、若迦字下加恒達者、呼之為吉八反耳。或迦字下加恒達、即半音呼之。師子国三蔵所訳儀軌皆爾云々。然而此相違、南天竺中印度所伝不同也」(『韻学史』p.248)

この部分は悉曇字記の「或字有闕則加恒達之文、而音掣呼之。(如迦法等等下有達文、則云桔(吉八反)楔(苦八反)等也。)」という記述に対する解釈を示したもので、『韻学史』は次のように推定している。

- ・甲説…ㄨなどのへが加えられたものは、「吉八反[kat]」という音で読む。
- ・乙説…ㄨなどのへが加えられたものは、半音[k]で読む。

しかしながら『韻学史』も指摘しているようにこの記述の文意は不分明で、南天竺の音と中印度の音がどのようであったかははっきりしない。あるいはㄨを「吉八反で読む」と「半音で読む」ことは同義であり、「南天竺と中印度の間で音が違う」というのは単に事実の指摘に留まり具体的な説明はなされていないとも解釈できる。すなわち悉曇字記の「ㄨ=桔(吉八反)」という記述は、「ㄨ=kāṭ」ということを言っているのではなく、漢字によって「k」という子音のみを表現する方法が無かったため、やむなく「吉八」という反切を用いたという可能性も考えられる。

安然(天台系・841~915頃)『悉曇十二例』

「全真相公次第記云、如ㄨ薩(sa)ㄨ囉(rva)字、其上

「次明^{リョク}同章^{リョク}中^{リョク}半^{リョク}躰^{リョク}字^{リョク}音^{リョク}者、字紀中云、^{リョク}字^{リョク}祐^{リョク}（古八反）^{リョク}禊^{リョク}（苦八反）若爾^{リョク}（^{リョク}字^{リョク}可^{リョク}成^{リョク}力^{リョク}祐^{リョク}音^{リョク}。然^{リョク}不^{リョク}爾^{リョク}。故此文在^{リョク}。可^{リョク}得^{リョク}意^{リョク}。文既云へ、^{リョク}力^{リョク} ^{リョク}職^{リョク}。故知^{リョク}、^{リョク}字^{リョク}直^{リョク}成^{リョク}力^{リョク}字^{リョク}職^{リョク}字、^{リョク}終^{リョク}響^{リョク}也。若爾^{リョク}、短^{リョク}声^{リョク}可^{リョク}呼^{リョク}俱^{リョク}声^{リョク}牟^{リョク}。祐^{リョク}字^{リョク}依^{リョク}反^{リョク}音^{リョク}法^{リョク}反^{リョク}之^{リョク}。得^{リョク}俱^{リョク}音^{リョク}。恐^{リョク}字^{リョク}紀^{リョク}文^{リョク}依^{リョク}此^{リョク}敷^{リョク}。尋^{リョク}連^{リョク}声^{リョク}法^{リョク}下^{リョク}得^{リョク}等^{リョク}字^{リョク}、上^{リョク}字^{リョク}有^{リョク}俱^{リョク}響^{リョク}。云^{リョク}半^{リョク}音^{リョク}者^{リョク}若^{リョク}指^{リョク}此^{リョク}敷^{リョク}。 ^{リョク}字^{リョク}或^{リョク}云^{リョク}發^{リョク}者^{リョク}以^{リョク} ^{リョク}字^{リョク}為^{リョク}發^{リョク}終^{リョク}響^{リョク}敷^{リョク}。下^{リョク}得^{リョク}等^{リョク}字^{リョク}、上^{リョク}字^{リョク}必^{リョク}有^{リョク}律^{リョク}（津^{リョク}力^{リョク}）（和^{リョク}言^{リョク}）響^{リョク}。是^{リョク}此^{リョク}半^{リョク}音^{リョク}義^{リョク}敷^{リョク}。若^{リョク}准^{リョク}此^{リョク}者^{リョク}、^{リョク}等^{リョク}字^{リョク}可^{リョク}有^{リョク}不^{リョク}音^{リョク}。若^{リョク} ^{リョク}字^{リョク}可^{リョク}云^{リョク}劫^{リョク}、^{リョク}等^{リョク}半^{リョク}音^{リョク}可^{リョク}同^{リョク} ^{リョク}字^{リョク}音^{リョク}云^{リョク}。此^{リョク}義^{リョク}細^{リョク}可^{リョク}論^{リョク}之^{リョク}云^{リョク}。問^{リョク}文^{リョク}既^{リョク}云^{リョク} ^{リョク}力^{リョク} 迦^{リョク}云^{リョク}何^{リョク}云^{リョク} ^{リョク}字^{リョク}有^{リョク}俱^{リョク}音^{リョク}耶^{リョク}。答^{リョク}、既^{リョク}云^{リョク} 迦^{リョク}。故^{リョク}亦^{リョク}非^{リョク} ^{リョク}祐^{リョク}（古^{リョク}八^{リョク}反^{リョク}）音^{リョク}。迦^{リョク}字^{リョク}更^{リョク}云^{リョク}半^{リョク}音^{リョク}。何^{リョク}非^{リョク}俱^{リョク}音^{リョク}耶^{リョク}。例^{リョク} ^{リョク}字^{リョク}本^{リョク}音^{リョク} 苾^{リョク}也。或^{リョク}文^{リョク} ^{リョク}尾^{リョク}多^{リョク}（二^{リョク}合^{リョク}字^{リョク}半^{リョク}音^{リョク}与^{リョク}尾^{リョク}合^{リョク}呼^{リョク}云^{リョク}）当^{リョク}知^{リョク}多^{リョク}字^{リョク}半^{リョク}音^{リョク}也。迦^{リョク}字^{リョク}半^{リョク}音^{リョク}亦^{リョク}可^{リョク}俱^{リョク}音^{リョク}云^{リョク}。可^{リョク}有^{リョク}重^{リョク}問^{リョク}答^{リョク}音^{リョク}也。」（『韻学史p. 408』）という記述が見られる。明覚の言うところは次のように纏められよう。

- ・「半音」は該当字の頭子音のみをとって上字の響きとすることである。例えば ^{リョク} ^{リョク} を「発」と音訳する場合、^{リョク} は「発」の終響（すなわち hat の t）にあたる。
- ・すると ^{リョク} 等は津（t）、^{リョク} 等は不（f/p）を指すことになる。
- ・^{リョク} (bih) は「苾 (bit)」と訳されたり、「尾多（二合字半音与尾合呼云く）」と訳されたりする。これは「苾 (bit)」の中の「知」と「多」の半音が同じであるからである。「迦」の半音も「俱」である。

ここにおいて初めて、「半音」の具体的な発音が論じられることになる。言い換えれば、日本人に分かりやすい説明が試みられているとも言えよう。これまでは恒達点を説明するためにただ「半音」で済まされ、

『悉曇字記』の引用（古八反）に留まっていたところを、一步進んで「半音」とは何か、という問題に取り組んでいるといっても良い。

その背景には恐らく、悉曇学の衰退がある。開音節が基本となる日本語によって単独の子音を表現するのは困難であり、またそれを口頭伝承でなく書記言語によって伝えるのは更に困難なことだと思われる。その困難な作業を取って明覚が必要があったのは、口頭による伝承に不都合が生じてきたからでは無かろうか。すなわち、悉曇学の衰退に伴って正確な恒達点の

発音が失われつつあったからこそ、書記言語に頼って伝承する必要が生じたと推測する。

次に『梵字形音義』においても、

「次半体^{リョク}字^{リョク}音^{リョク}者、智^{リョク}広^{リョク}云、如^{リョク} ^{リョク} 迦^{リョク} 佉^{リョク} 等^{リョク} 下^{リョク} 有^{リョク} へ^{リョク} 画^{リョク} 則^{リョク} 云^{リョク} ^{リョク} 祐^{リョク}（古八反）^{リョク} 禊^{リョク}（苦八反）等^{リョク} 也。此文未^{リョク} 得^{リョク} 音^{リョク}。然^{リョク} 私^{リョク} 見^{リョク} 諸^{リョク} 文^{リョク}、^{リョク} ^{リョク} 字^{リョク} 云^{リョク} 發^{リョク}、^{リョク} ^{リョク} 云^{リョク} 力^{リョク}、^{リョク} ^{リョク} 云^{リョク} 職^{リョク}、^{リョク} ^{リョク} 苾^{リョク}、^{リョク} ^{リョク} 云^{リョク} 挽^{リョク}、定^{リョク} 知^{リョク}、此^{リョク} 等^{リョク} 半^{リョク} 体^{リョク} 字^{リョク} 直^{リョク} 成^{リョク} 上^{リョク} 字^{リョク} 終^{リョク} 響^{リョク} 也。以^{リョク} 此^{リョク} 云^{リョク} 半^{リョク} 音^{リョク} 字^{リョク} 也。凡^{リョク} 字^{リョク} 上^{リョク} 横^{リョク} 画^{リョク} 是^{リョク} 形^{リョク} 也。今^{リョク} 半^{リョク} 体^{リョク} 字^{リョク} 省^{リョク} 此^{リョク} 形^{リョク}。故^{リョク} 无^{リョク} 阿^{リョク} 響^{リョク}、但^{リョク} 成^{リョク} 半^{リョク} 音^{リョク} 也。^{リョク} 字^{リョク} 津^{リョク} 阿^{リョク}（二^{リョク}字^{リョク}借^{リョク}字^{リョク}）音^{リョク} 也。今^{リョク} ^{リョク} 字^{リョク} 省^{リョク} 首^{リョク} 形^{リョク}、下^{リョク} 加^{リョク} へ^{リョク} 画^{リョク} 故^{リョク} 直^{リョク} 成^{リョク} 津^{リョク}（借^{リョク}音^{リョク}）音^{リョク} 也。与^{リョク} ^{リョク} 相^{リョク} 合^{リョク} 呼^{リョク} 云^{リョク}、^{リョク} 發^{リョク}、^{リョク} 字^{リョク} 久^{リョク} 阿^{リョク}（二^{リョク}字^{リョク}借^{リョク}字^{リョク}）音^{リョク} 也。今^{リョク} ^{リョク} 省^{リョク} 形^{リョク}、加^{リョク} へ^{リョク} 画^{リョク} 故^{リョク} 直^{リョク} 成^{リョク} 久^{リョク}（借^{リョク}音^{リョク}）音^{リョク} 也。与^{リョク} ^{リョク} 相^{リョク} 連^{リョク} 云^{リョク} ^{リョク} 力^{リョク} 也。一切^{リョク} 例^{リョク} 之^{リョク}。」（『韻学史p. 424』）

と、同様の趣旨を述べている。ここで注目されるのは、智広『悉曇字記』の説、すなわち「^{リョク} 祐^{リョク}（古八反）^{リョク} 禊^{リョク}（苦八反）」に解説を加えている部分である。この説はすなわち、宗叡と安然が引用し、「宗叡甲説」の論拠となる部分である。ここで明覚は、「^{リョク} 祐^{リョク}（古八反）^{リョク} 禊^{リョク}（苦八反）」の意味が不明だとし、具体例を挙げて恒達点の発音を説明している。

また明覚は『悉曇要決』の中でも「半音」について言及しているが、省略に従う。

恵什^{リョク}（真言系・1135頃）『拈捨悉曇思惟要決鈔』

「諸^{リョク} 梵^{リョク} 文^{リョク}、於^{リョク} 之^{リョク} 半^{リョク} 躰^{リョク} 字^{リョク} 多^{リョク} 注^{リョク} 半^{リョク} 音^{リョク}。而^{リョク} 上^{リョク} 亦^{リョク} 山^{リョク} 記^{リョク} 意^{リョク} 乍^{リョク} 用^{リョク} 此^{リョク} ^{リョク} 祐^{リョク}（古八反） 諸^{リョク} 梵^{リョク} 文^{リョク}、判^{リョク} 取^{リョク} 半^{リョク} 音^{リョク} 用^{リョク} 之^{リョク} 義^{リョク}。乃^{リョク} 尋^{リョク} 諸^{リョク} 梵^{リョク} 文^{リョク} 半^{リョク} 音^{リョク}、但^{リョク} 取^{リョク} 始^{リョク} 久^{リョク}（吳^{リョク}音^{リョク}）声^{リョク}、入^{リョク} 上^{リョク} 字^{リョク} 終^{リョク} 音^{リョク} 謂^{リョク}、如^{リョク} 以^{リョク} ^{リョク} (a) 阿^{リョク} (ro) 嚕^{リョク} (li) 里^{リョク} (k)（半^{リョク}音^{リョク}）呼^{リョク} ^{リョク} (a) 阿^{リョク} (ro) 嚕^{リョク} (le) 力^{リョク} (k) ^{リョク} 也。此^{リョク} 是^{リョク} 取^{リョク} ^{リョク} 首^{リョク} 声^{リョク}、撰^{リョク} 上^{リョク} ^{リョク} 終^{リョク} 音^{リョク} 亦^{リョク} 呼^{リョク} 力^{リョク} 也。故^{リョク} 或^{リョク} 阿^{リョク} 嚕^{リョク} 里^{リョク} 迦^{リョク}（半^{リョク}音^{リョク}）、或^{リョク} 只^{リョク} 云^{リョク} 阿^{リョク} 嚕^{リョク} 力^{リョク} 也。何^{リョク} 以^{リョク} 知^{リョク} 之^{リョク}、迦^{リョク} 注^{リョク} 半^{リョク} 音^{リョク} 故^{リョク} 雖^{リョク} 云^{リョク} 迦^{リョク}、实^{リョク} 是^{リョク} 取^{リョク} 久^{リョク} 半^{リョク} 音^{リョク}、入^{リョク} 上^{リョク} 字^{リョク} 終^{リョク} 音^{リョク}、当^{リョク} 云^{リョク} 力^{リョク} 也。於^{リョク} 迦^{リョク} 住^{リョク} 半^{リョク} 音^{リョク} 意^{リョク}、其^{リョク} 在^{リョク} 茲^{リョク} 耳^{リョク}。」（『韻学史p. 388』）

これは、

- ・始めの久（k）が上字の終わりの音に入る。
- ・lik（^{リョク} に対して里（半音）、里迦（半音）、力、のような訳し方がある。
- ・里迦（半音）という場合、迦は ka でなく k であり、前の li に入って lik になる。これはすなわち力と同じ発音である。

ということであろう。また次のような記述も見られる。「注^{リョク} 字^{リョク} 音^{リョク} 隨^{リョク} 宜^{リョク}、不^{リョク} 定^{リョク}。或^{リョク} 撰^{リョク} 上^{リョク} 字^{リョク} 終^{リョク} 響^{リョク} 半^{リョク} 体^{リョク} 之^{リョク} 字^{リョク}、无^{リョク} 其^{リョク} 注^{リョク}、或^{リョク} 隨^{リョク} 体^{リョク} 副^{リョク} 漢^{リョク} 字^{リョク}、更^{リョク} 示^{リョク} 半^{リョク} 音^{リョク} 也。而^{リョク} 尋^{リョク} 半^{リョク} 音^{リョク} 亦^{リョク} 如^{リョク} ^{リョク} 字^{リョク}。本^{リョク} 是^{リョク} 加^{リョク} 字^{リョク} 一^{リョク} 音^{リョク}、隨^{リョク} 密^{リョク} 声^{リョク} 分^{リョク} 二^{リョク} 音^{リョク} 故^{リョク}、半^{リョク} 是^{リョク} 久^{リョク}、半^{リョク} 亦^{リョク} 阿^{リョク} 声^{リョク}。而^{リョク} 此^{リョク} 中^{リョク} 除^{リョク} 阿^{リョク} 且^{リョク} 始^{リョク} 久^{リョク} 声^{リョク}」

也。云爾於「頭声」別不可呼其半音。依之用此等半音之時、必密入上字終響也。故設別注迦、若是半音字必以可屬上字。二字雖異、連声之法自以爾也。但所以注迦者、為示本。是迦半音也。凡用漢字、或隨人不同。若拋智広伝注祐有行先牟。而紀者既異不可一例歟
 (『韻学史』p. 390)

ここでも、「ka (加)」は一音であるが、密声ではkとaに分かたれる。「加〈半音〉」のような場合は始めのkを指す」というように音節を分解し、その分解した要素を「半音」と呼称している。『韻学史』も指摘するように、このような考え方は先述の明覚の論と重なる部分が多い。

更に『韻学史』によれば次の著書にも「半音」が現れるという。またその他にも大正蔵悉曇部に「半音」が使用されている著が若干ある。しかしながら「半音」に関しては特に新しい分析は為されていないようなので、本稿では著者と書名を挙げるに留める。

兼朝『悉曇反音略釈』(1166)

心蓮(?~1181)『悉曇相伝』

寛海(~1212)『悉曇小雙紙』

道範(1178~1252・真言宗)『悉曇字記聴書』

了尊『悉曇輪略図抄』(1287写)(大正蔵No.2709)

長覚(1340~1416)『悉曇決訳鈔』

浄厳(1639~1702)『三密鈔』(大正蔵No.2710)

以上を要するに、真言宗系統においては宗叡、淳祐、仁海、寛助、寛智、恵什、心蓮、寛海、道範、了尊、長覚、浄厳の撰述書に、天台宗系統においては安然、明覚の撰述書に「半音」を使用した形跡が見られたことになる。

但し宗叡は真言宗の僧であるが天台宗の円仁にも伝授しているし、またその円仁の系列にある安然は、天台宗ばかりでなく真言宗系統の悉曇学も受学したと言う。安然以後天台宗では安然の学問を継ぐものがほとんどいなかったようであるが、一方の真言宗、特に仁和寺所伝の悉曇学に影響を与えたようである。仁和寺所伝の悉曇学には源照、済暹、寛智、恵什等が出たが、彼らの悉曇学は安然の影響が強く現れていると言う。『韻学史』はこの事実に関して、「天台の学風が学者独自の創意工夫をおもんじて、学問の伝承におもきをおかなかった」「真言の学風は秘密と伝承をおもんじ、師資相承をむねとしたので、ながくその学問がつたわっていった」ことを原因として推定しているが、従うべきものと思われる。

一方「半音」に対する解釈に注目すれば、両系統に亘って多くの記述が見られる。全体としては、但達点の発音の説明過程において「半音」が積極的に使用さ

れていたのはこれまで見てきた通りである。当初は宗叡の記述に代表されるように、但達点を加えた梵字の発音は、必ずしも明瞭な説明は与えられてこなかったようである。それは開音節構造の日本語の音節体系、またそれを基本として構築されていった文字体系による単独子音の説明が困難であったと同時に、口伝によってその発音の正確性が保証されていたことが原因と考えられる。そして悉曇学の衰微に伴い「半音」の意味するところが失われていく状況の中で明覚は「半音」がどのような音であるかをわかりやすく記述する必要があったと推測する。

この明覚の論は天台宗よりもむしろ真言宗系統で伝承されていったようで、それは『拈捨悉曇思惟要決鈔』を初めとして、心蓮・寛海・長覚に繋がっていくという流れが認められるのではなかろうか。

3 日本漢字音における「半音」

漢字音の分野において「半音」がどのように使用されていたのかは知るところが少ないが、悉曇学における機能が多少拡大された形で使用されている。それが顕著に現れるのが九条本『法華経音』(明覚著力)である。

第2節に見られたように、但達点や半音の説明を試みる時、しばしば入声字が利用される。先述のように、明覚の悉曇研究では但達点の説明の過程で半音、すなわち子音の抽出が試みられているが、そこにも「半音」と入声字の関連が強く認められた。明覚の著と推定されている『法華経音』においては両者の関係が更に顕在的になり、入声字を掲出している部分の見出しが「半音」となっている。これは「半音」が悉曇学だけでなく漢字音の世界で使用されている例として、注目すべきものである。恐らくこれは「末尾に半音を有する字」のような意であろうが、入声音と半音の概念同士が強く結びついていることが窺われる。

漢訳仏典における「半音」の主要な用法は、不空訳の諸陀羅尼に代表されるように注された音訳字の母音を捨象して残った頭子音だけを指定するための注であった。それは当然梵語音を漢字で表記するための手法であり、但達の点の機能をカバーしようとした工夫として捉えられる⁷⁾。このように悉曇学では頭子音の抽出のために「半音」はあったのだが、明覚は梵語音のみならず漢字音読における音節末の子音、すなわち入声音も「半音」として処理しようとしている。

但し、音義類において入声音、或いは入声字を指して「半音」「半音字」という術語が使用された例は『法華経音』が管見に及んだのみである。時代が下った『明覚三蔵流法華経音義』⁸⁾を見ても「半音」は使用され

ていないことを考え合わせると、漢字音の世界において「入声音＝半音」という術語の使用法は単発的なもので、後世に伝えられないままであったと考えられる。

4 声明譜への「半音」の流入

声明の世界における「半音」は既に述べたことがある（浅田 1998、2000）ので簡単に触れるに留める。概ね漢字音の世界における使い方に準ずると考えて良いと思う。問題はそれがどのように声明に入り込んだのかである。

天台宗系統・真言宗系統の声明譜を通覧すると、「半音」は真言宗系統の声明譜にのみ出現する。以下に管見に及んだ資料と用例を若干挙げる。

金沢文庫蔵〔南山進流聲明集〕（南山進流）

福〈半〉、足〈半〉

金沢文庫蔵〔法則集断簡〕（相応院流）

得〈半〉、益〈半〉

仁和寺蔵乞戒（相応院流）

一〈半音〉、佛〈半〉、足〈半〉、一〈半〉

仁和寺蔵理趣経（流派不明）

滅〈半〉、法〈半音〉、業〈半音〉、欲〈半〉、集〈半〉、
説〈半音〉、得〈半音〉

仁和寺蔵乞戒聲明口傳（相応院流）

足〈マサシクハ折アケスシテ只半〉、一〈半〉、仏
〈半〉

随心院蔵聲明集（南山進流）

徳〈半〉

東寺蔵法則集上（相応院流）

福〈半〉、覺〈半〉、佛〈半〉、蜜〈半〉、族〈半〉、
積〈半〉、慾〈半〉、識〈半〉、極〈半〉、悉〈半〉、
脱〈半〉、力〈半〉、及〈半〉、得〈半〉

東寺蔵秘讚集（相応院流）

菓〈クノ字ハ又ヲ云フ時聊クト云フ也雖然非半音
ニ也〉、法〈半〉、各〈半〉、或〈半〉、日〈半〉、福
〈半〉、寂〈半〉、服〈半〉、樂〈半〉

東寺蔵法則集（相応院流）

法〈ツノ字キカセス舌ヲ上ノアキトニツクレハ
ノツカラ半音ニナルナリ〉

上野学園日本音楽資料室蔵要略集（相応院流）

力〈半音〉、佛〈ヲハリニテ半音ニソトラクキカ
カノホトニカナヲ成スヘシ〉、佛〈ヲハリニテ半
ニスヘシ〉、説〈半音ロヲ合ス〉〈ククムキカセ
ス〉、徳〈半音〉〈トクノクヲカクスヘシシタハ
ニヲモワヘテクトスル也トツトスル様也〉〈ク
ラククム心ニクトヲモワヘテ音ニハドトハカ
リシテクトハキカセズ〉、一〈半音〉、佛〈半
音〉、法〈半音〉、密〈半

音〉、佛〈半音〉、樂〈スヘニテ小クラキカ
スヘシクヲキカセシ（未詳）モクルシミナシ〉
〈半音〉、覺〈半〉、國〈半音〉〈スヘニテ半
ニ成スヘシ〉、佛〈半音〉、薩〈半音ロヲ合
ス〉

以上を見ると「半音」の使用は入声字に限られることが明らかである。先の漢字音の場合と同様に、声明における「半音」は音節末の子音、すなわち入声音の概念と合致する。すなわち明覚の影響が見て取れるのであるが、それならば真言宗でしか使用されないのはなぜであろうか。また天台宗では「半音」が出現しない一方で、「半音」と同じような機能を小書きが担っている⁹。このことはどのように説明すべきだろうか。

声明譜における半音の使用例を見てもう一つ特徴的なのは、相応院流と南山進流のいずれにおいても「半音」を使用しているということである。そうすると半音が真言声明の中で使用されるようになったのは両流が分立する以前に遡る蓋然性が高い。

真言声明においては久安年間（1145～50）に紫金台寺御室覚性法親王によって当時の声明家が集められ、諸流を整理し相応院流、大進上人流（南山進流）、醍醐流の三流を定めたという記録が残っている¹⁰。これには疑義を差し挟む向きもあるが、ここでは一応信じることにすると、それ以前には既に「半音」が使用されていたことになる。従って、注記などを書き込んだ声明譜が作られるのは鎌倉時代以降のことであるから、「半音」は口伝のみによって伝承されていた時代から、既に使用されていたということなる。恐らく、声明の伝授の場において入声音のような音節末子音を説明する術語が必要とされていたのであろう。

一方天台声明譜に「半音」が出現しないという事実からは次のような可能性が示唆される。一つは声明譜上に「半音」などの注記が書き込まれるようになった鎌倉時代あたりには天台宗において「半音」は使用していなかったが、それ以前は真言宗と同様に使用していたという可能性、いま一つは天台声明では最初から「半音」が使用されていなかったという可能性である。明確にはわからないが、開音節言語の中で音節末子音を説明する必要があるという状況は真言宗と同様であっただろうし、両宗声明の交流も活発であっただろうことを鑑みるに、今のところ前者と考えたい。すなわち、天台宗においては当初「半音」（乃至それに類する術語）を使用していたが、譜上に視覚化する段階では「半音」という術語によってではなく、より抽象的な手段、すなわち小書きを採用したと推測する。

従って声明界において「半音」が使用され始めたのは、少なくとも平安時代後期以前であると考えられる。

次にその経路であるが、漢字音の世界における「半音」は『法華経音』に特有な術語であったことを考えれば、残る経路は悉曇学からの流入が思い当たる。声明には梵語を唱える梵唄があり、梵語の誦読と声明は密接な関係にあったと考えられる。恐らく日常的な梵語誦読の場において、梵語に関する術語であった「半音」が声明に入り込み、定着していったのではなからうか。日本悉曇学において「半音」を使用した僧を挙げると、真言宗では宗叡(809～884)、淳祐(890～953)、仁海(951～1046)、寛助(1052～1125)、寛智(1046～1111)、恵什(1135頃)、心蓮(?～1181)、寛海(?～1212)、道範(1178～1252)、了尊(1287頃)、長覚(1340～1416)、浄厳(1639～1702)、天台宗では安然(841～915)、明覚(1056～1106)であった。

このうち淳祐、仁海、寛助は真言宗の密宗声明血脈に現れ、安然も天台宗の声明血脈に現れる¹¹。このうち誰が「半音」を声明に持ち込んだか特定するのは困難だが、悉曇学と声明は双方とも仏教において重要な位置を占め、相承の対象とされていただけでなく、安然の悉曇蔵に典型的に見られるように互いに密接な関係であったことを考えると、悉曇学から声明に「半音」という術語が流入した可能性が高いと考える。恐らく、実際の声明の誦読の場において入声音を表現する必要があり、「入声」という字音の術語に比してより具体的なイメージが湧く「半音」という悉曇学の術語が流用されたということであろう。

おわりに

本稿は前稿で触れた声明譜における「半音」という注記に焦点を絞り、その起源を探ると同時にどのような経路を経て声明譜に使用されるに至ったのかを明らかにしようとしたものである。

既に述べたように、中国における恒達点の音訳字に対する注として考え出された「半音」は日本悉曇学を受け継がれ、そこから声明に流用されたという経緯を辿ったと考えられる。その時期は詳しくは分からないが、平安後期以前と推定される。

「半音」は様々な悉曇研究書がそれについて言及しているところから見ても、悉曇学においてかなり一般的な術語であったと思われ、梵語に現れる閉音節を開音節言語を基本とする日本語において処理するための重要な役割を担っていた。一方声明においても師から弟子に伝承する際に音節末子音を表現する術語を欲す

る状況があったと思われる。その結果として「半音」は悉曇学から声明に転用され、入声字の音節末子音を特に表す注記として使用されたということになる。

注

¹ 浅田健太郎(2000)「声明資料における入声音」『国語学』51巻3号、武蔵野書院、右1-15頁

² 以下本稿では「半音」「半」「半音呼」「半呼」「半声」等の注記を一括し、「半音」と呼称することとする。

³ 〈 〉内は割注。以下同様。

⁴ 図書寮本類聚名義抄に、「半音〈陀羅尼集誦注爾注一一者必須片音〉」と有る。

⁵ 但し金剛智訳薬師如来観行儀軌法(大正蔵No.923)・李無諂訳不空羼索陀羅尼經(大正蔵No.1096)では阿地瞿多用法との類似が指摘できる。前者では「悉」に対する注に類似性が見られ(恐らく転用か)、後者では「二合」の解説における「半」の用法に類似性が見られる。

⁶ 馬淵(1965)による推定に従う。

⁷ 但し、涅槃点(ah)がついた字母の発音を示すのに「半音」を使用した可能性が認められる(尾多〈半音〉)例も存する。

⁸ 『古辞書音義集成第五巻 法華経音義三種』(汲古書院、1978)

⁹ 声明譜における「小書き」に関しては、拙稿「声明資料におけるずらし表記を巡って」(訓点語と訓点資料第一〇一輯、1998、pp48-62)で詳しく論じた。

¹⁰ 『声決書』など。

¹¹ 大山公淳『仏教音楽と声明』(東方出版、1989)による。

参考文献

- 馬淵和夫(1984)『増訂日本韻学史の研究I』臨川書店
水谷眞成(1994)『中國語史研究 中國語學とインド學との接点』三省堂
浅田健太郎(1998)「声明資料におけるずらし表記を巡って」『訓点語と訓点資料』第101輯
浅田健太郎(2001)「声明資料における入声音」『国語学』51巻2号

(指導教官：沼本克明)